倉部　慶太 （2019）『言語記述論集』11：39-49

北ビルマ・カチン族の民話資料 *

倉部 慶太
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
キーワード：カチン族，ビルマ，ミャンマー，東南アジア，昔話，民間説話

1　はじめに

本稿では，筆者らが北ビルマにおける長期的なフィールドワークにより蒐集したカチン族の民間説話のうち，「マナウ祭りへ行ったカムカム鳥」(2 節)，「溺死のはじまり」(3 節)，「山姥」(4 節)，「蛇婿」(5 節)，「なぜセミにはらわたがないか」(6 節)，「サルに連れ去られた男」(7 節)，「金の生る木」(8 節) と題する 7 編の物語の和訳を提示する。

カチン族 (Kachin) はビルマ (ミャンマー) 有数の少数民族の 1 つであり，北ビルマに位置するカチン州とシャン州北部に居住する。人口は 50 万から 150 万と推測される (Smith 1994)。中国雲南省に居住する景頗族 (Jingpo) および東北インドに居住するシンポー族 (Singpho) も同一の民族である。カチン族は言語的に多様な民族であり，ジンポー語 (Jinghpaw)，ツァイワ語 (Zaiwa)，ロンウォー語 (Lhaovo)，ラチッ語 (Lacid)，ンゴーチャン語 (Ngochang)，ラワン語 (Rawang) など互いに通じない，多様な言語を話す言語集団からなる。このなかでジンポー語はカチン族の共通語としても通用している (Kurabe 2016，2017 などを参照)。

筆者は，2009 年から北ビルマにおいてジンポー語を対象としたフィールドワークをおこなってきた。調査の一環として，筆者はジンポー語によるカチンの口承資料 (大部分は民話) の大規模な蒐集をおこなった (倉部 2018 参照)。特に 2016 年からは複数の現地協力者と共同で資料の蒐集を精力的におこなった。その成果として，2019 年 3 月までに約 2,400 話 (213 時間) の口承音声を蓄積した。そのうち 1,805 話はオーストラリアの危機文化アーカイブ PARADISEC で公開済みである (Kurabe 2013) [1] 。本稿で提示する民話資料の音声およびジンポー語による書き起こしは PARADISEC で利用可能であるが，翻訳は利用可能ではない。

筆者らによるドキュメンテーションの目的の 1 つは，人々の考えや生活を色濃く反映する，口承，民族知，生活知など無形文化財の記録と保存にある。長い間世代を超えて受け継がれてきたこれら文化財は，近年の急速な社会変容により，記録されることのないまま，急速に失わ

* 筆者による現地調査は，平成 24-25 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費)「ジンポー語の記述言語学的研究」(課題番号：JP12J02938)，平成 26-28 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費)「北部ビルマにおけるジンポー語危機方言の調査とドキュメンテーション」(課題番号：JP14J02254)，平成 29-31 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B)「ビルマの危機言語に関する緊急調査研究」(課題番号：JP17H04523) の助成を受けている。

[1] http://catalog.paradisec.org.au/collections/KK1

れつつある。例えば，2018 年 12 月 14 日の民話録音後のインタビューにてある男性は次のように語っている。「この昔話は私が子どものころに母から聞きました。ちょうどいまの時期 (涼期)，夜が長い時期に，畑仕事が終わったあと，イモを煮ながらいろりを囲んで聞きました。近所のあの家で昔話を語るそうだと聞きつけると，子どもたちみんなでその家に遊びに行きました。各家の野菜を持ち寄り，いろりを囲んでご飯を食べながら，昔話を聞きました。ところが，いまの若者はこのような文化を失ってしまいました。若者の楽しみはいまと昔では異なります。テレビやインターネットが昔話にとってかわってしまいました。いまの若者はギターを弾き，いまどきの歌を歌うことなどに興味を持っています。いまの若者たちだけの責任ではありません。私たち大人の責任でもあります。」

また，村落の生活様式も大きな変化にさらされている。例えば，2019 年 2 月 8 日の対面調査にてある男性は次のように述べている。「5 月頃マリ川[2] が大雨で濁ると，小魚たちはマリ川の支流に上ってくる。上ってきた魚たちをカイツブリ[3] が捕えて食べる。その近くの茂みに隠れていた女たちが竹でつくった楽器でカイツブリを驚かす。驚いたカイツブリはクチバシに挟んだ魚を吐き出し，人々はそれを拾って回収する。これは 4，5 人でおこなう。カイツブリは 200 から 300 ほど。捕まえた魚は魚醤などに利用する。年に 3 回ほどおこなう。かつてルンシャーヤンなどの村落でおこなった。いまは採金で川が汚れ，魚は来なくなった。いまの人は誰もこの漁法を用いなくなり，それを知っている人も少なくなってしまった。」

口承，民族知，生活知などの消失は，カチンのみならずほかの周辺の少数民族においても起きていると推測される。これら無形の文化財は充分に記録されていないことが多いが，いま記録しなければ二度と取り戻すことができなくなるのではないだろうか。

2　マナウ祭りに行ったカムカム鳥

2.1　データ

本民話は 2015 年 4 月 4 日にカチン州ミッチーナー市のシャタプル地区において筆者がおこなった対面調査により得られたものである。話者はカチン州マチャンボー郡マロット村出身の男性 (1956 年生) である。本資料の音声およびジンポー語による書き起こしは PARADISEC で公開している。アーカイブにおける本民話の ID は KK1-1861 である (DOI: 10.4225/72/598c88b046e15)。音声資料の再生時間は 2 分 27 秒である。録音ではリニア PCM レコーダー (ZOOM H4n) にラペルマイク (AT9904) を接続し，音声 (44.1kHz/16bit) を取り込んだ。

[2] イラワジ川の上流。
[3] カイツブリ目カイツブリ科カイツブリ属に分類される鳥類。

2.2　本文

昔，鳥たちがマナウ祭り[4] に行くためにお互いに化粧をしていたとき，カムカム鳥[5] を誘うと，カムカム鳥はいいました。「私の羽は美しくありません。化粧もできません。だから，私は祭りには行きません。」「ねえ，行きましょうよ」と他の鳥たちが誘うと，カムカム鳥は「では，私にあなたたちの羽を貸してくださいよ」と頼みました。「ええ，いいですよ。」そうやって，鳥たちは各々の体から 1 本ずつ羽を抜き，カムカム鳥に挿してやりました。そうして，カムカム鳥は大変美しい鳥になりました。

マナウ祭に着くとカムカム鳥はいいました。「私はとても美しい。私が鳥のなかで一番美しい鳥だ。」そういってカムカム鳥は彼に羽毛を貸してやった鳥たちのことも忘れて威張り散らしました。ほかの鳥たちと話さえしたがりませんでした。それに怒った鳥たちはカムカム鳥から羽を引き抜いてしまいました。すると，カムカム鳥は以前のようにくすんだ色の鳥になってしまいました。そして，カムカム鳥は恥ずかしさのあまり逃げていきました。こうして，カムカム鳥は夜にしか姿を現さない鳥になってしまいました。いまでも夜になると，カムカム鳥のカットカンカンカンという鳴き声だけが森の中で聞こえてくるのです。

3　溺死のはじまり

3.1　データ

本民話は 2016 年 12 月 22 日にカチン州ミッチーナー市のドゥーカトン地区において筆者がおこなった対面調査により得られたものである。話者はカチン州スンプラブム郡ウム・ウマ村出身の男性 (1942 年生) である。本資料の音声およびジンポー語による書き起こしは PARADISEC で公開している。アーカイブにおける本民話の ID は KK1-0169 である (DOI: 10.4225/72/598891446e931)。音声資料の再生時間は 7 分 34 秒である。録音ではリニア PCM レコーダー (ZOOM H4n) にショットガンコンデンサーマイク (RØDE NTG2) を接続し，音声 (44.1kHz/16bit) を取り込んだ。

3.2　本文

いま私が語るのは，溺死ということのはじまりについてです。昔，ある青年が川岸に沿って歩いていると，虫に食われている木を見つけました。彼は刀を使ってその枯れかけた木から虫を追い払ってやりました。虫がいなくなると，その木は再び大きく育つようになりました。

ある日，青年は池に魚を捕まえに出かけました。池の中に網を投げ入れ引きあげようとすると，何かが網に引っかかりました。いくら強く引いても網はあがりません。仕方なく青年は以

[4] カチン最大の祭り。マダイと呼ばれる天の精霊を祀り，豊作や繁栄を祈願する。祭りの広場には精霊が依り憑くマナウ柱と呼ばれる渦巻や菱形の描かれた複数の柱が立てられ，人々は行列をなして柱のまわりを練り歩きながら，精霊に捧げる舞いを踊る。

[5] 滅多に姿を見せないが長い尾を持ち色が黒いと信じられている夜鳥。それを見たものに不運が訪れるという。

前助けた木に網を結びつけて，網をそのままにして家に帰ってしまいました。

実は網にかかったのは大きなヘビのような龍でした。網から抜け出せない龍を見た龍の娘が池から出てきて，木にたずねました。「あなたは昔，虫に食われて死にかけていましたが，どうやって治ったのですか？」木は答えました。「ある青年が私を助けてくれたのです。あなたも青年に助けを求めてはどうですか？」

龍の娘は人に化け，青年のところにやって来ました。「お兄さん，あなたは病気を治すことができる人と聞いてやってきました。いま私の父が池で網にかかって死にかけています。助けてください。」青年は「ああ，私が捕まえたのは龍だったのだ」と悟り，「いいですよ。助けてあげましょう」といいました。

青年が池に戻って網を少し引っ張ると，龍は少し動くことができるようになりました。青年は 7 日かけて少しずつ網を引き，いま龍が抜け出せそうになったとき，龍の娘にたずねました。「あなたの父を助けることができれば，私に何の褒美をくれますか？」龍の娘は答えました。「私があなたのところにお嫁に行きます。」青年が最後にもう一度，網を引っ張ると，龍の父は網から抜け出すことができました。そうして青年と娘は結婚しました。

ある日，龍の娘は青年にいいました。「池の魚やエビたちは私の兄弟です。だから捕まえないでください。」青年はいいました。「分かりました。これからは池の生き物を捕まえて食べたりしません。」

青年の家の近所に 9 人のいじめっ子たちが住んでいました。彼らはよく池に行って魚を大量に捕まえていました。ある日，青年が魚を捕らなくなったのをみたいじめっ子たちは，こっそり青年の籠にドジョウを 1 匹入れました。魚を入れられたことに気がつかなかった青年は，籠を持ってそのまま家に帰ってしまいました。

家に帰ると龍の娘はいいました。「いまあなたの籠から私の兄弟の匂いがします。」「私は何も捕まえていませんよ。私は池の生き物は食べません。」しかし，娘が籠をのぞいてみるとドジョウが入っていました。「あれほどいったのに，あなたは私の言葉を聞かなかったのですね。」龍の娘は失望し，龍の姿にもどって親の住む池に帰ってしまいました。

娘を愛していた青年は，それからというもの，毎日のように池に通いました。そして，娘が池に飛び込んだところに座って，泣いてばかりいました。龍の父は娘に青年のもとへ帰るよう促しました。しかし，裏切られたと思った彼女は，青年のもとへは戻りませんでした。

ある日，龍の娘は自分の長い髪を編んでござを作りました。そして，ござを青年がいつも泣いている場所に置いておきました。その日，青年が来てござの上に座ると，龍の娘は一気にそれを引っ張り，池の中へ青年を引きずり込んでしまいました。そうして，青年は溺れ死んでしまいました。それ以来，溺死ということがはじまったのです。

4　山姥

4.1　データ

本民話は 2017 年 2 月 15 日にカチン州ミッチーナー市のレーゴン地区において筆者の協力者がおこなった対面調査により得られたものである。話者はカチン州ワインモー郡カグ

ラン村出身の女性 (1975 年生) である。本資料の音声およびジンポー語による書き起こしは PARADISEC で公開している。アーカイブにおける本民話の ID は KK1-1094 である (DOI: 10.4225/72/598b32ab3e408)。音声資料の再生時間は 4 分 8 秒である。録音ではリニア PCM レコーダー (ZOOM H4n Pro) にショットガンコンデンサーマイク (RØDE NTG2) を接続し，音声 (44.1kHz/16bit) を取り込んだ。

4.2　本文

昔，焼き畑で生計を立てている村があったそうです。その年は畑の草がひどく生い茂った年でありました。ある日，2 人の女が畑の草むしりに出かけました。私の畑，彼女の畑，というふうに，2 人は分かれて別々に自分の畑の草むしりをしました。2 人の畑は離れていてお互いがお互いを見ることができませんでした。

日が暮れてくるとこちら側の畑の女が大声で呼びました。「お姉さん！日も暮れてしまったので，今晩は畑の小屋で一夜を明かしましょう！」すると遠くの方から「いいですよ！」という声が聞こえたそうです。彼女はそれを友人だと思い，「お姉さん！こちらの畑へ来てください！おかずを持ってこちらへ来てください！私もご飯を炊いておきますよ！」と叫んだそうです。すると「いいですよ！」とまた声がしました。

日が暮れると彼女の畑へ山姥[6] がやってきました。女の声を聞いたのは友人ではなく山姥だったのです。「おかずをたくさん持ってきましたよ。」そういって山姥が差し出したのは大量のいも虫でした。それを見た人間の女はたいそう怯えました。「あなたはおかずを料理してください。私はご飯を炊きおわりました。」人間の女はいいました。やって来た女は「はい，分かりました」といって，鍋でいも虫を煮はじめました。煮おわると「夕飯を食べましょう」といって 2 人は夕食を食べはじめました。しかし，人間の女は「これは人間の食べるものではない」と，食べるふりをしながら，おかずをすべて竹敷きの床下に入れて隠しました。それを見た山姥は「お姉さん，こんなにおいしいものをもったいない」といって，床下のおかずを拾って食べてしまいました。

食べおわると山姥はいいました。「さあ，いまおやすみの時間になりました。あなたたち人間はどうやって寝ますか？」それを聞いた人間の女は「これは山姥だったのだ」と気が付きました。女は答えました。「我々人間は寝るときにこのように口を大きく開いて寝ます。」山姥は「それでは私も口を大きく開けて寝よう」といいました。そうして，山姥は口を大きく開けたまますっかり眠ってしまいました。それを見た人間の女は彼女の腰巻についている鈴をちぎって，焚火であぶり出しました。「山姥が寝ているすきに鈴を真っ赤にあぶって口の中に放り込んでやろう。」女は真っ赤にあぶった鈴を響かせながら，大きく開いた山姥の口の中へ一気に投げ込みました。

ところで，昔は命を持たないものたちも言葉を発したそうです。竹や丸太まで言葉を発したそうです。人間の女は小屋から逃げ出すときにいいました。「小屋さん！私はもう帰りますよ！

[6] レップと呼ばれ，奥山に棲むと信じられている伝説上の妖怪。本稿では「山姥」と訳す。

山姥が起きて私が小屋を出たかどうかたずねても決して出たと答えてはなりません！」女は逃げる先々で通り過ぎるすべてのものに同じようにお願いしました。「丸太さん！山姥に人間が来たかと聞かれても決して来たと答えてはなりません！」「砂さん！来たかと聞かれても決して来たと答えてはなりません！」「小石さん！来たかと聞かれても決して来たと答えてはなりません！」「野鶏さん！」「木の葉っぱさん！」「稲さん！」「小川さん！山姥に人間がここを渡ったかと聞かれても決して渡ったと答えてはなりません！」このように彼女は通り過ぎるものすべてにお願いをしながら逃げました。丸太を飛び越えるときもそのようにお願いをして飛び越えました。「来てない！来てない！」と答えるようにすべてのものたちにお願いをしました。

小屋を出て追ってきた山姥も通り過ぎるすべてのものにたずねました。「いまここへ人間の女が来なかったか？」「来てない！」「来てない！」「来てない！」……　ところが，山姥は女を追ってきたそうです。「来てない！」と答えても頭の固い山姥は追ってきました。小川を渡るときも小川にたずねました。「人間の女がここを渡らなかったか？」「渡っていないよ！」しかし，山姥はあきらめずに追いかけてきました。そして村へ入ってきて，通り過ぎるすべてのもの，見るものすべて，あるものすべてに人間が来なかったかたずね歩きました。「来ていない！」「来ていない！」「来てない！」「来てない！」……

人間の女はついに自宅の敷地にたどり着きました。女はそこでもお願いをしました。「果実の木さん！山姥に人間が来たかと聞かれても決して来たと答えてはなりません！」「鶏さん！豚さん！人間が来たかと聞かれても決して来たと答えてはなりません！」「草さん！人間が来たかと聞かれても決して来たと答えてはなりません！」「もみ殻さん！人間が来たかと聞かれても決して来たと答えてはなりません！」「玄米さん！人間が来たかと聞かれても決して来たと答えてはなりません！」「臼さん！人間が家に入ったかと聞かれても決して入ったと答えてはなりません！」「はしごさん！人間があなたをのぼったか聞かれても決してのぼったと答えてはなりません！[7]」「はしごの上の床さん！人間があなたを踏んだか聞かれても決して踏んだと答えてはなりません！」そうして，女は部屋に入り，家族のものたちが寝ている布団の中に潜り込み，最初から一緒に寝ていたふりをしました。

ところが，彼女は若鶏にだけは伝えるのを忘れてしまっていたそうです。だから，若鶏は大声で鳴き出しました。「来たよ！来たよ！入ったよ！入ったよ！」それを聞いた山姥は女の家の中へ入ってきました。そして，人々が寝ているのを見つけました。山姥はいいました。「いま新しく布団に入った者は足が冷えているだろう。長い間布団で寝ていた者は足が温まっているだろう。」山姥は一人ひとりの足をなでながら温かさを確かめて歩きました。そうして，真中で寝ている人の足に触れたとき「お前か！」そう叫んで山姥は女を布団から引きずり出し，食べてしまいました。山姥のお話はここでおしまいです。

[7] カチンの伝統的家屋は高床式であり，はしごをのぼって部屋に入る。

5　蛇婿

5.1　データ

本民話は 2016 年 12 月 21 日にカチン州ミッチーナー市のドゥーカトン地区において筆者がおこなった対面調査により得られたものである[8]。話者はカチン州スンプラブム郡ウム・ウマ村出身の男性 (1942 年生) である。本資料の音声およびジンポー語による書き起こしは PARADISEC で公開している。アーカイブにおける本民話の ID は KK1-0148 である (DOI: 10.4225/72/5988910b9ba41)。音声資料の再生時間は 5 分 53 秒である。録音ではリニア PCM レコーダー (ZOOM H4n) にショットガンコンデンサーマイク (RØDE NTG2) を接続し，音声 (44.1kHz/16bit) を取り込んだ。

5.2　本文

昔，ある母と娘がバナナの葉を集めに山へ出かけました[9]。そのとき，彼らは大きな 1 匹のヘビに出くわしました。ヘビは娘を大変気に入ったので，夜になると村へ行き，彼らの家の前にやってきました。そこでヘビは脱皮をして，人の青年に化けました。ヘビの青年は家に入り，娘と夜を過ごしました。こうして，ヘビは毎晩のように娘に会いにくるようになりました。

朝になって山へ帰るたびに，ヘビは鱗を一枚落としていきました。そのヘビの鱗は金片に変わりました。この金片をたくさん手に入れた母娘は，大変裕福になりました。娘は母にいいました。「お母さん，このヘビは夜に青年の姿になるけれど，朝になるとまたヘビの姿に戻って，いつも山へ帰ってしまいますよ。」母はいいました。「娘よ，今夜，ヘビが寝ているすきに彼の脱いだ皮を燃やしてしまいなさい。」翌日，娘は本当にヘビが寝ているすきに，こっそり彼の皮を燃やしてしまいました。朝になって青年は皮がないためにヘビの姿に戻れなくなってしまいました。それ以来，娘と青年は蛇皮からできた金を使って幸せに暮らしました。

それを妬んだ隣人の女はたずねました。「お姉さん，あなたと私は昔はともに貧しかったではないですか。あなたは一体どうやって裕福になったのですか？」母は自分と娘が森へ出かけてヘビを見つけたこと，ヘビが夜ごとに人に化けてやってくるようになったことなど，最後まですべて正直に話しました。その話を聞いた隣人は思いました。「私もそのヘビを捕まえて裕福になってやろう。」翌日，隣人の女は娘を連れて山へでかけました。そして木にニシキヘビが巻き付いているのを見つけ，それを籠に入れて家へ持ち帰りました。

家に帰ると，隣人の女は娘とニシキヘビを 1 つの部屋に入れ，一緒に寝かせました。すると，ニシキヘビは足先からゆっくりと娘を呑みはじめました。「お母さん！」娘はいいました。「ヘビが私の足を舐めて呑みはじめました！いま，かかとまで呑みました！」女はいいました。「お前を愛しているから足を舐めたのですよ。」すると，ヘビはまた娘を呑みはじめました。「お母さん！いま，ヘビが膝まで呑みました！」「お前を愛しているから冗談をしているのです。」「お

[8] 同様の民話がバングラデシュ・チッタゴン丘陵に居住するチャック人にも伝わっている (藤原敬介氏, p.c., 2019)。

[9] バナナの葉は皿やご飯の包みとして用いられる。

母さん！いま，腰まで呑みました！」「お前を愛しているからです。」「胸まで呑みました！」しかし，女は金片のことばかり考えていたので，我慢するようにとだけ娘にいいました。「いま，首まで呑みましたよ！」といってから娘の声は途絶えました。「これで翌朝には娘も金片を手に入れることができるだろう。」そう思った女はたいそう喜びました。

朝になって女が部屋に入ると，娘も金片も見当たりませんでした。ただヘビが大きな腹を引きずりながら山へ帰っていくのが見えただけでした。こうして，隣人の女は金片を手に入れることができなかったばかりか，娘までも失うことになってしまったのでした。

6　なぜセミにはらわたがないか

6.1　データ

本民話は 2017 年 1 月 27 日にカチン州ミッチーナー郡ラダコン村において筆者がおこなった対面調査により得られたものである[10]。話者はカチン州ミッチーナー郡タンプレ村出身の男性 (1977 年生) である。本資料の音声およびジンポー語による書き起こしは PARADISEC で公開している。アーカイブにおける本民話の ID は KK1-0222 である (DOI: 10.4225/72/598891fa1de91)。音声資料の再生時間は 2 分 19 秒である。録音ではリニア PCM レコーダー (ZOOM H4n Pro) にショットガンコンデンサーマイク (RØDE NTG2) を接続し，音声 (44.1kHz/16bit) を取り込んだ。

6.2　本文

昔，セミには人と同じようにはらわたがあったそうです。ある日，1 匹のリスがたいそう大きな木の実を採って丸ごと食べていました。そのとき，突然，セミが大声で鳴き出したそうです。その声に驚いたサルが飛び跳ねました。すると，それを見て驚いたリスは，高い木の上から木の実を落としてしまいました。木の下ではゾウたちが食事をしていました。落ちた木の実はゾウの腰に当たりました。それに驚いたゾウは走って逃げ出しました。そのとき，ゾウは足でカエルを踏みつけて，カエルからはらわたが飛び出してしまったそうです。

カエルはゾウにいいました。「いま，私のはらわたが出てしまいました。あなたが治してください。」ゾウはいいました。「それは私のせいではありません。踏みつけたのは確かに私です。でも，あの木の上のリスが私の腰の上に木の実を投げ落としたので，私は驚いてあなたを踏んでしまったのです。」そこでリスになぜ木の実を落としたかとたずねるとリスはいいました。「私はサルが飛び跳ねたので，それに驚いて木の実を落としたのです。サルさん，あなたはなぜいきなり飛び跳ねたのですか？」サルはいいました。「私はセミたちがいきなり鳴きはじめたので，驚いて飛び跳ねたのです。それを見たリスが驚いて木の実を落としてしまったのです。」動物たちはセミにいいました。「いま，カエルのはらわたがすべて飛び出してしまいました。心臓がすべて潰れてしまいました。いま，カエルにははらわたがありません。だから，いま，あなたはカエルにはらわたを返さねばなりません。」

[10] 類話は雲南にも伝わっている (斧原孝守氏, p.c., 2019)。

そうして，動物たちはセミのはらわたを引きずり出し，それをカエルに入れて，治してやりました。だから，いま，ほかの動物たちはみな，はらわたを持っていますが，セミだけははらわたを持ちません。それは，彼らのはらわたをカエルに入れたためなのです。

7　サルに連れ去られた男

7.1　データ

本民話は 2017 年 1 月 30 日にカチン州ミッチーナー市のジャンマイコン地区において筆者の協力者がおこなった対面調査により得られたものである[11]。話者はシャン州ムセ郡ナムタウ村出身の女性 (1964 年生) である。本資料の音声およびジンポー語による書き起こしは PARADISEC で公開している。アーカイブにおける本民話の ID は KK1-0279 である (DOI: 10.4225/72/598892f081341)。音声資料の再生時間は 4 分 7 秒である。録音ではリニア PCM レコーダー (ZOOM H4n) にラペルマイク (AT9904) を接続し，音声 (44.1kHz/16bit) を取り込んだ。

7.2　本文

昔，ある山の村に畑を耕し生計を立てている貧しい家族がいました。彼らの畑にはしばしばサルがやって来て，作物を食い荒らしました。ある日，家族の男がサルを捕えるため，酒かすを用意しました[12]。男は酒かすの入った桶を畑に置いて，物陰からこっそり様子を伺っていました。ところが，男は居眠りをしてしまいました。そこへサルたちがやって来て，酒かすを食べはじめました。サルたちはそこで眠っている男を見つけました。彼らはそれを死体だと思ったので，男を連れ去り，山へ運びました。

目を覚ました男がこっそり目を開けて見ると，深い森の中を運ばれているのを見ました。「どこに向かうのだろう？」興味を持った男は，何もいわず，死んだふりをしてそのまま連れ去られていきました。最後にたどりついたのはサルが宝物を隠す大きな石穴でした。そこで男は突然，大きな声で叫びました。サルたちは「人が生き返った！」と驚いて，一目散に逃げ去りました。そうして，男はサルたちが集めた金銀財宝を手に入れ，家に持ち帰りました。このようにして，男の家族はたいそう裕福になりました。

それを妬んだ村人が男に事情を尋ねました。「あなた方は以前，たいそう貧しかったのに，どうやってこうも裕福になったのですか？」事情を知った村人の男は，自分も同じようにやってみようといって，畑で死んだふりをしていました。そこへまたサルたちがやって来て，男を運びはじめました。連れ去られる最中，男がこっそり目を開くとたいへん深い山の樹上を渡っているのが見えました。驚いた男は思わず「ゆっくり運んでくれ」といいました。その声に驚いたサルたちは一斉に逃げ去り，男は木から転落して死んでしまったそうです。

---

[11] 本民話は日本の昔話「猿地蔵」と類似している。類話は中国にも伝わっている (斧原孝守氏, p.c., 2019)。

[12] 山地では酒や酒かすでセルを酔わせることで捕えるという。

8　金の生る木

8.1　データ

本民話は 2017 年 1 月 29 日にカチン州ミッチーナー市のシャタプル地区において筆者の協力者がおこなった対面調査により得られたものである。話者はカチン州バモー郡ノッキュー村出身の女性 (1996 年生) である。本資料の音声およびジンポー語による書き起こしは PARADISEC で公開している。アーカイブにおける本民話の ID は KK1-0262 である (DOI: 10.4225/72/598892a715f37)。音声資料の再生時間は 3 分 53 秒である。録音ではリニア PCM レコーダー (ZOOM H4n Pro) にショットガンコンデンサーマイク (RØDE NTG2) を接続し，音声 (44.1kHz/16bit) を取り込んだ。

8.2　本文

昔，ある村に未亡人と 2 人の息子が住んでいました。彼らは焼き畑で生計を立てていました。ある日，母が大きな病をして死の床についたとき，息子を呼びました。彼女は 3 つの種を取り出し，長男に託し，こう伝えました。「あなたは兄ですから，まだ幼い弟の世話をしなさい。私がいなくなったあと，この種を植えなさい。木が育つと実をつけるでしょう。そうしたら，実を 1 日に 1 つだけお取りなさい。一度にたくさん取ってはなりません。1 日に 1 つだけ取って，あなたたち兄弟はお互いに仲良く暮らしなさい。」そう遺言を残してから間もなく，母は亡くなりました。母の言葉を守り，兄は弟を愛し，弟は兄を愛し，こうして兄弟は仲良く暮らしておりました。

成長した兄はある女と結婚しました。また，木も大きく育ち，やがて実をつけました。実をつけると，その木は金の実をつけるようになりました。大変価値のある実をつけました。これを見た兄の嫁は思いました。「やがて夫の弟が成長すると結婚するだろう。そうすると，弟の嫁にも実を与えなければならないだろう。また，彼らが子を持つと，その子にも実を与えなければならない。金の実を私たちだけで独占することができなくなってしまう。」こうして嫁は夫の弟を追い出したいと思うようになりました。そして夫にいいました。「いまのうちにこの金の実をすべて取りましょう。そして，2 人だけでもっと大きな村に移り住みましょう。」夫は答えました。「なりません。私は幼い頃から弟と 2 人で暮らして来ました。弟も私を愛していて，私たちは離ればなれになることはできません。私たち兄弟は小さい頃から両親がいませんでした。私は弟にとって親のかわりなのです。」嫁はいいました。「あなたは私を愛していますか？それとも弟をもっと愛していますか？」「もちろんあなたのことも愛しています。こんな話はやめようではありませんか。」

やがて弟は成長し，結婚する歳に達しました。一緒に住むことを嫌った嫁は，夫に弟と離れて暮らすよう何度もいいました。あまりにもいうので夫もついに考えを改めました。「弟も成長したし，嫁のいうことも聞かねばならない。」彼が告げると，嫁は「この木の実をすべて取りましょう」といいました。夫はいいました。「母が 1 日に 1 つだけ実を取るようにいいました。」「あなたの母がなぜそういったかは知ったことではありません。」「でも，母はそのようにいい残

しました。」「私たち 2 人は大きな村に移住し，今後ここに住むわけではありません。だから，たくさん取っていきましょう。どうせまた生えてくるでしょう。だから，たくさん取っても問題ありません。」夫も了解し，実を 1 つ取りました。2 つ目を取ったとき，突然，その実は大蛇となり，兄弟 2 人を呑み込んでしまいました。

参考文献

Kurabe, Keita. 2013. Recordings of Jinghpaw folktales (KK1), Digital collection managed by PARADISEC. [Open Access] DOI: 10.4225/72/59888e8ab2122

Kurabe, Keita. 2016. A grammar of Jinghpaw. Ph.D. dissertation, Kyoto University. pp.668.

Kurabe, Keita. 2017. Jinghpaw. In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*. Second edition. 993–1010. London and New York: Routledge.

倉部慶太. 2018.「ミャンマー北部で失われつつある口承文芸をあつめる」『FIELD PLUS』20: 16–17.

Smith, Martin. 1994. *Ethnic Groups in Burma: Development, Democracy and Human Rights*. London: Anti-Slavery International.

受理日 2019 年 4 月 15 日